ふくしの窓　2023年9月10号インタビュー

縁は
道を拓く

自分の好きなことで
ボランティアをしよう

藤井温美さん

【センター職員】
始めたいと思います。
最初に地域で活動するきっかけを教えていただけますか。

【藤井さん】
元々は、母が地域でボランティア活動をしていたのが最初のきっかけです。
はじめはどっちかっていうと否定的で、何のためにやっているのだろうなっていう感じで、遠目から見ていました。ですが、大学入学後にインドネシアに留学した際、小学校で日本語や日本文化を教えたり、大学生と一緒にそれぞれの国のことについて話し合う国際交流などの経験を通じて、自分が今までに学んだことや経験したことをインプットするだけじゃなくて、人にアウトプットしたり、誰かのためになるようなことをするのって、とっても楽しいということに気づきました。
そして、なんか自分でもやれることがあればいいなと思って。母や地域の仲の良い大人の方々にちょっと相談しながらボランティア活動を始めました。

最初は、ただの雑談というか、正直冗談みたいな感じで、インドネシアのこととか、国際交流みたいなことが何かできたらいいですねって雑談して居たら、急に、本当にやろう！みたいな感じになって。口では「やりましょう、やりましょう」って言ったのですが、でも頭の中は正直パニック状態で(笑)。やるの？って、本当に。
実際に何かやるって決まってからは、せっかくやるならば、何事も悔いを残さないようにやるのがいいかなと思って。インドネシアっていう自分の大好きな国をもう1回学び直したりとか、インドネシア人の友人に相談して、何が流行っているか教えてもらったり、自分の留学時代の食文化を振り返ってみました。
経験したことや学んだことを、この地域に住んでいる人たち、お子さんからご高齢の方まで知ってもらって、インドネシアへ旅行するきっかけになったり、勉強するきっかけになればいい。何かのきっかけになればいいなと思って。一生懸命取り組みました。

【センター職員】
とっても大変だったと思います。

【藤井さん】
今回の展示は、私ひとりではやってないと思っています。作業期間は、職員の方が毎回のように訪ねてきてくれて、私を支えてくれました。いつも、なんか申し訳ないなって感じていましたが、感謝しています。
実は、大学院の卒業試験など様々なことが重なり、正直ちょっとつらいなっていう時期はありました。でも、大変だった経験は、人生の中で良い糧になるというか、必要な時間だったなって思えています。

長い間、大学院の友達や先生、家族としか喋ってない期間もあったので、企画で外に出るきっかけをくれたっていう意味では、とってもありがたかったです。

【センター職員】
普段目にすることのできない、衣装や展示をご用意いただき、えんがわギャラリーから発展した体験の機会を企画していただき感謝しています。

【藤井さん】
何か見るだけ聞くだけ、それだけでも十分かもしれないけれど、やっぱり実際体験してみるっていうのが、結局は一番大事なんじゃないかって思っていて。
それで今回のインドネシアの企画では、実際にバリ人の男性用民族衣装を用意しました。
すると、来館した方が飛び入りで衣装を着用してくれて。私の企画をきっかけにバリに興味を持ちましたとか、インドネシアに興味を持ちましたっていうふうに言ってくれて、近くにあるインドネシア料理屋さん教えてくださいとか、インドネシアの何かお祭り日本でやっていますか、などの質問をいただきました。
この企画をきっかけに私以外の周りの人たちが、外に出ていくきっかけになってくれたっていうのが嬉しかったなって思います。

【センター職員】
ありがとうございます。活動が広がって別のボランティアもされていると思います。
活動に参加する前と、現在、藤井さんのなかで変化はありましたか。

【藤井さん】
自分は体調の関係で、やりたいことが100%できていないっていう状況なのですが、自分ができる範囲内で何か人のために役立てることがあるならやってみたいなって思っています。
今は高齢者の方へスマホの使い方を教えるボランティアと、小学校でなかなか授業に参加できない生徒たちを支えるボランティアのふたつの活動をやっていて、最初は、自分がいろいろできないから、出来ないなりにやれることがあるならやってみよう、っていう感じでボランティアに参加していましたが、実際やってみたら、意外と考えることが多かった。
担う作業の分量が多く感じたり、ちょっとだけ不満に思うことがありました。もしかして、他の人より若いから、あれこれ頼まれちゃうのは違うんじゃないかと思って。

【センター職員】
押し付けられちゃう時もありますよね。

【藤井さん】
なんかそんな感じがしちゃって。
ある程度の範囲だったら、もちろん、自分の年齢的にできる範囲が多いのであれば、力になりたいなとは思うのですけど。違和感はあります。
私のことを知っているわりには、いろいろやってほしいことが多すぎるなって思ったりすることもあって、何か、ボランティアって、奉仕の精神は大切だけど、ボランティアをやる側の奉仕の精神だけじゃなくて、それをまとめている人たちと、そのボランティアやっている人たちのお互いの支え合いが、もっと大切なんじゃないかなって、ある意味気づくきっかけになりました。

【センター職員】
課題も出てくると思います。そうした時って、どういうふうに解決されているのでしょうか。

【藤井さん】
自分がボランティアを始める前だったら、あんまりはっきり意見するってことはなかったと思います。むしろボランティアを始めた今だからこそ、ちゃんと言わないと、なあなあにされるっていうか、曖昧にされるのが嫌だと思って。
今は、わりと思ったことは素直に言ったり、直接、言葉で伝えるのがちょっと難しいというか、相手に対してちょっと強い言葉に捉えられたら嫌だなって思う場合は、文面にして伝えています。要求するならば、それなりにこちらも工夫して要求をするべきかなって思っています。

不満を持てたからこそ、何か自分の意見をもっとちゃんと言おうとか、向き合う姿勢をとると相手もいろいろ動いてくれたりします。やはり違うなって思ったら、ちゃんと話し合って、相手の意見を聞くことができたりとかするので、ある意味、互いの関係が良くなっていくっていうのも実感しています。
それはボランティアのポジティブな面として、すごく嬉しいなって感じています。
普段、同世代の人とあまり話をしない分、自分と向き合ってくれる人たちとは、できるかぎり真剣に、本音で話し合いをした方がいいなと。そういう機会をくれたっていうのでは、ボランティアをしてよかったなって思います。

【センター職員】
これからの目標はどんなことを描いていますか。

【藤井さん】
今は、何も考えてないっていうのが正直な本音です。やりたいことはたくさんあるけれど、自分の置かれている状況的に、やれない部分もあるので、それをどうやって見極めるか、選別して、その中でずっとこれからも続けていきたいなって思う何かを、ひとつかふたつ絞れるようにしたいなって思っています。その中にはもちろんインドネシアのことだったり、今新しく勉強を始めた手話のことだったり、他にもたくさんの趣味、興味をもてることがあるので、もう少しいろいろと自分がやってみたり、体験して勉強をしてから、インプットしたものをアウトプットできるような場所を探していきたいなって思います。
私は、「縁は道を拓く」をモットーにしているので、どこからかやってくるその縁を見つけたら、その縁にしたがって、自分の新しい道、これからを通っていく、歩いていく道を切り開いていけたらなって思います。

【センター職員】
いい言葉ですね。

【藤井さん】
もともとは大学の先輩から、「縁は道を拓く」っていう言葉は、いろんな悪い縁もいい縁もあるけれど、その縁が自分のもとに来てくれるということは、何かしら運命だったり、何か行動するきっかけになったりとかするから、その縁は逃がさないようにねって言ってもらったのがきっかけなので、もう、その先輩には、感謝です。
大学時代4年間は本当に今までの人生の中で一番大切な4年間だったなって、思います。

ギャラリーで初の座談会を開催ましたが、実は座談会がわからず、まず国語辞典で意味を調べましたが載っていなくて。載ってない、どうしようってなって、英和辞典を開いたりとか、なぜか辞典から離れられない。「座談会とは」って調べて、でも会議じゃないし、講演会でもないし、どうしようって。
すごく悩んだ末に、もう何も考えないで行こうって。座談会というものに参加した事がないから、もう知らないものは知らない、自分がなんとなく思っていることとか、とりあえず、インドネシアって国を紹介しようってなりました。
結局は、一緒に参加してくれた大学時代のお友達、近くに住んでいるインドネシア人の先生に来てもらって、参加してもらって、支えてもらって開催できました。

【センター職員】
みなさんに支えられているっていうことが、よかったですね。

【藤井さん】
人には本当に恵まれているなって感じています。

【センター職員】
これから地域で活動する人に対して、メッセージがありましたらお願いします。

【藤井さん】
メッセージなんて、おこがましいっていうか、そんな立場じゃないよなというのがあるんですけど。強いて言うなら、それぞれの人たちが、今まで培ってきた経験だったり、知識っていうのは、自分にとっては、「大したことないもの」って思っていても、他の人からすると、すごく貴重なものだったり、簡単には経験できないようなことだったりするかもしれません。今までインプットしてきたものを、アウトプットする機会の一つとしてボランティアっていうのをやってみるっていうのもなかなかいいのかなって思います。

あとは、私が縁っていうものを大切にしているので、ボランティアと縁が結びついたら、きっと今まで関わってこなかった人たちとも、関わりを持てるいいきっかけになると思うので、難しいことは考えずに、まずはやってみてほしいですね。
とりあえず気軽に始めてみる。習い事感覚でもいいし、友達作りとか、そんなふうに思ってもらえたらいいかなって思います。
若者世代っていう言い方はあまり好きじゃないですけど、同世代、20代とかこれから30代になる人たちとかに、持っている知識や経験を、自分の住んでいる地域でアウトプットしてもらえたらいいなって思います。

【センター職員】
自分の経験をアウトプットするっていうことが楽しいな、と思うようになったきっかけをもう少し詳しく教えてください。

【藤井さん】
インドネシア留学時、日本のことを知りたいと言う、インドネシア人の小学生とか大学生の人たちと話す機会があり、その中で、私が知っている日本のお祭りのことや、日本の食べ物の話をしました。
そういう一般的なことを話していく中で、「あなたは自分の地域でどういう生活をしているの」とか、「あなたの地域ではどういう人たちが、どうやって支え合って生きているの」などの質問を受けて、母が行ってきた子供たちへのボランティアや、高齢者会食の活動を急に思い出して彼らに伝えました。

すると、「日本は、地域の人たちが、なんて素敵な活動をしているんだ」、「素晴らしいね」って、驚かれて。彼らは「あなたがここで私達にボランティアの話をしてくれているのも、同じ活動だよ」って言われて、ああ、そうなんだと思いました。
話して伝えるだけでも、ボランティアになる。もしかしたら、彼らはボランティアっていう気持ちでは聞いてなかったかもしれないけれど、私からすると、ボランティアの一つというか、誰か助けるとか、支えるものになるのかな、って思って。
そうしたら、ボランティアは堅苦しいものというよりも、意外と楽しいものなんだなって感じられて、誰かに伝えるって必要だな、大切だなって思った経験がきっかけで、帰国してから自分でもやれることをやってみようって考えになりました。

【センター職員】
留学していた期間はどのくらいでしたか。

【藤井さん】
大学の3年生から、4年生なので、2017年の夏から2018年の夏の1年間です。

【センター職員】
留学行く前、お母様が地域活動されてらっしゃる姿を見ていたと思いますが、お母様はどんなふうに見えていましたか。

【藤井さん】
正直、無意味なことをしているなって。
その、なんていうか、利益にならないことをしているなと。
家族から、私に「パソコンで作ってくれ」と頼みごとをされると、なんで関係ないのに私がやらなきゃいけないんだ、って思えて。家族だと気軽に頼まれちゃうので、心の中でお前がやれよ、と実は反発していました。

【センター職員】
当時から比べて、ボランティア活動の見え方は変わりましたか。

【藤井さん】
すごく必要だなって気づきました。
自分がボランティア活動に参加したことで、グループ内のボランティア同士で意外と不満があること知ることができました。見て見ぬふりをしているのか、本当に見えてないのかどっちなのかわからないけど、自分は新参者だけど、何もわからないからこそ、割とずけずけと意見を言って、改善を一緒にしていきたいなって思うことができました。
おかげで、最近は家族から何か頼まれても、若干の対価は求めつつも、嫌な気持ちではやっていません。

【センター職員】
今回の企画をお手伝いしてくれた友人はどのような方ですか。

【藤井さん】
幼なじみで、幼稚園から知っている友達です。
その子のお母さんも、いつも地域のイベントで写真やビデオを撮ってくれている人で、その幼なじみ本人も今まで小中高大、いろいろとイベントに参加したりとか、アルバイトしたりとか、大学で日本文化について学んだりした経験があり、私とはまた全然違う経験をしてきた友達なんです。
私もこれまで日本伝統文化伝承師っていう資格を取るために日本文化とか、日本の伝統的なこととかをたくさん勉強してきました。

ボランティアまつりの後に、彼女と夕飯一緒に食べようってなって、ファミリーレストランで2時間ぐらい、これからこの地域で誰に対してどういうイベントをやっていきたいか、それをきっかけに、どういうふうになってもらいたいか、たくさん話し合いました。
既にボランティアとしての経験のある人たちの意見も大切だし、したことがない人たち、年齢に関係なく、何か新しいことをやってみたいなと思ってる若い人たち、この3種類の人たちが一緒になって関わって1つのイベントをやったら、きっと自分たちの予想した内容よりも、遥かに良いものができるよね、と盛り上がりました。
一応、第一弾の企画書が完成していて、調布社協の職員に見てもらって具体的な内容を相談している最中です。

香の道って書いて香道。
でも、香道って聞くと、なんか難しいとか真面目とか、お金かかりそう、みたいなネガティブなところだけイメージされそうな面もあるのですが。
最終目標としては、そういう香りの道を、多くの人に知ってもらいたいっていうものはあるけれど、大前提として香り、嗅覚ってすごい人間の生活の中で大事だよねっていうのを伝えたくて。
身近な花の香りだったりとか、普段自分たちが食べている食べ物の匂いとか香りとかってのをちょっと意識してもらって、それがきっかけで香道だったり、アロマセラピーだったりに興味を持つでも良いし、他にもイベントなどで、例えば食べ物を味わうだけじゃなくて、よく見て楽しむとか。
食事は見て楽しむのも大事って言うけれど、そこに見て、匂いをかいで楽しむっていうのもちょっと付け加えて。食文化に対してとか、好き嫌いとか偏食とか、そういうのも治すきっかけになったらいいなって思っています。
全然違う分野への派生という知識の発展ができたらいいなと、企画中です。

それは、私の中でその目標ってよりかは、やってみたいことの一つ。
勝手に私達が作ったやりたいことリストの一つだけど、他の人たちを巻き込んでやれたら、もっと楽しいっていうかエキサイティングっていう感じです。

【センター職員】
地域をどうするのか、課題意識に考えが及んでいるっていう部分は、活動に奥行きが出た感じですね。なにか変化があったのでしょうか。

【藤井さん】
もっとこの街に住み続けたいよね、とか、もっとこの街でやりたいことがたくさんあったらいいよねっていう気持ちが、この地域を対象にやりたい、イベントをやりたいっていうモチベーションになっているかなって。
もちろん私自身は海外も大好きだから、海外にも住みたいという気持ちも夢では持っているけれど、その目標の中にあるわけじゃないからちょっと違うし、誰かの夢だったり、目標とかに、自分たちが何かしらで関われるならいいよねっていうところからスタートして、最初は大きなことではなく、まずは自分たちが今住んでいる地域の人たちを対象に、自分たちでいろいろとチャレンジしながらたくさんの成功や失敗とかを経験している最中です。
幼なじみの彼女と、これからやりたいこととか、夢とか、目標とかも、私とは全く違うけれど、お互いやりたいことをやりながらも、共通点として、身近な地域に住んでる人たちが、つながりができていいよねとか、この地域で関わった人たちと普段の日常でも、なんか会えると嬉しいよねって。家族だったり、学校だったり、ご近所づきあいの中で、そういう会話が生まれたらいいよねっていうのが共通点です。
それで今回の香りのイベントを企画しようとなりました。
ちょっと興味を持って、知らないし興味もない、けど無料だから行こうかみたいな、そういうノリでなんか来てもらえたら、いいなって考えています。

【センター職員】
素敵ですね。
若い世代の子たちが地域に入ってきたくなるような、声掛けはできそうでしょうか。

【藤井さん】
いくつか手段はあると思います。まずはやはりSNSの有効活用。
私よりも下の世代の人たちは、おそらく私世代よりも、年上の人から使って欲しくない言葉がすごく多い気がしています。そういう言葉の使い分けっていうのを改めて、こちらもきちんと知る必要があると感じていて、若い世代との交流を積極的にしたい思っています。
そういう交流の中で、アイデアの交換ができればいいな、と。
「自分だけだと、これ以上アイデア出ないんだよね、たのむ、ほんとおねがい。」みたいに、軽い感じで話すと、小学生でも、想像もしなかったようないい案をたくさん出してくれることがあります。
今、私が大切だなって思っているのは、どんな言葉を使うと、子供たちにとって、自分たちが必要とされているとか、自分たちの案をちゃんと聞いてくれるんだっていうふうに、信頼してもらえるか。
それが私の一番学ぶべき内容かな、と思うので、ちょっと小学生たちが勉強している国数英理社の小学校3年生のドリルを買ってやってみたりしています。
「なるほどこういう言葉を普段勉強しているんだな」とか、「こういうことで揉めるんだ」とか、「女の子でもイモリとかセミとかが触れるんだ、いつから触れなくなるんだろう」、「男の子でも触れない子もいるなあとか」、とか、勝手に人間観察させてもらって楽しんでいます。
そういうZ世代の子たちと、実は私もギリギリZ世代なのですけど、言語を意識して考えてみるのがいいかなって、思っています。